UIFA JAPON NEWSLETTER

No. 110 Aug. 25, 2018

Union Internationale des Femmes Architectes Japon　国際女性建築家会議　日本支部

■主な内容

UIFA JAPON 会長就任挨拶及び 2018 年度通常総会報告

記念講演「不揃いの木を組む」ー技を伝え、人を育てるー
　宮大工棟梁・小川三夫氏の講演を聞き

UIFA JAPON 25 周年記念誌発行奮闘記

被災地通信（20）過去の災害から何を学んだか

川嶋幸江さんの思い出

2018 年度通常総会・記念講演会会場にて（写真：平野正秀）

UIFA JAPON 会長就任挨拶 及び 2018 年度通常総会報告
UIFA Japon President's Message and Annual Meeting Report

森田　美紀
MORITA Miki

森田美紀
UIFA JAPON 新会長

会長に就任し

6 月 16 日の総会で会長に選出された森田美紀です。

私が UIFA JAPON に入会したのは、大学の先輩にあたる寺本晰子さん（元会員・故人）に誘われて、震災復興見守りチームの一員となったことがきっかけでした。中越地震で被災した、新潟県長岡市小国町の法末集落、東日本大震災の被災地では「どこでもカフェ」「だれでもフォトグラファ」。熊本地震の被災地には私自身はうかがえておりませんが、御船町や熊本市で行われた「住宅相談」への支援活動を行ってきました。被災地や被災者のみなさまを前に、何ができるか分からないながらも、一生懸命役に立とうとやってきたつもりです。そして、それは、これからもできる限り、続けていこうと思います。

―26 年目に入り―

国際交流、会員相互の親睦と研鑽、社会貢献を柱とした活動を行って、UIFA JAPON も 26 年目に入りました。4 年後の 2022 年には、設立 30 周年を迎えます。世界大会は第 18 回アメリカ（ワシントン・ヴァージニア）大会以後、開催の情報が今のところありませんが、交流や活動において情報は発信していきたいと思います。

UIFA JAPON を生み、育て、守り続けてきてくださったすばらしい先輩方に恥じないよう、その方たちをお手本に、明るく元気良く頑張っていく所存です。よろしくお願いします。

2018 年度通常総会報告

2018 年 6 月 16 日（土）13:00 ～ 14:00、東京大学工学部 1 号館 15 号教室にて、第 26 回 UIFA JAPON 総会が開催された。正会員 70 名の内、出席 29 名、委任状 26 名で定足数を確認し、総会開催が成立。第 1 号議案の 2017 年度活動報告、会計報告、監査報告が行われ、承認された。

―新体制について―

第 2 号議案の役員構成については、新会長に森田美紀、新副会長に伊藤京子と岸本裕子を選出。理事の交代は、監事だった上田壽子が伊藤・井関に代わり総務へ、事業は新しく上野真城子と吉野泰子が岸本・林屋と交代。広報・渉外は交代なし、会計に飯田とわ・柏原雪子が新しく着任、今まで会計だった栗山が監事へ代わった。新体制は承認された。第 3 号議案の 2018 年度の活動計画、予算案が発表され、承認された。

―参加しやすい「基本活動とグループ活動」を目指す―

引続き、会員が参加・活動しやすい組織を目指す。

海外交流の会などを企画運営する事業委員会、ニューズレターの編集をする広報などの基本活動のほか、「この指とまれ！」の開催を地方で行うなど、活動を充実する。

昨年度から始めたグループ活動、岩手県岩泉町、新潟県法末、熊本県御船町などの被災地支援を中心にした災害復興見守りチームの 4 グループと、25 周年記念誌作成グループと UIFA JAPON 復興ハウス設計グループの 2 つからなる研究チームへは、会員全員が何らかのグループに所属し、活動していくことを促進する。そして支援活動に備え、寄付のお願いをする。

「不揃いの木を組むー技を伝え、人を育てるー」 宮大工棟梁　小川三夫氏の講演を聞き
2018 Annual Meeting Commemorative Lecture: Combining Uneven Timber Passing on Skills and Cultivating People

藤田　香織　許 楽
FUJITA Kaori　XU Le

講師：宮大工棟梁
小川　三夫氏（写真:小池）

小川三夫氏、昭和 22 年に栃木県生まれ、41 年に栃木県県立氏家高等学校卒業。44 年に西岡常一棟梁の内弟子となる。法輪寺三重塔、薬師寺金堂、同西塔の再建工事に副棟梁として携わる。52 年に鵤（いかるが）工舎を設立し、宮大工になりたい若者を育成している。

本講演会は、国際女性建築家会議日本支部主催により、「不揃いの木を組む」と題し、平成 30 年 6 月 16 日東京大学にておこなわれた。以下、その概要を示す。

修行

小川氏は昭和 39 年、修学旅行で初めて法隆寺五重塔を見て、宮大工の仕事を志した。しかし、サラリーマンであった父親は当時それを聞き、きっと苦しむだろうと、強く反対した。

41 年、奈良県庁で大工の仕事について聞いたところ、法隆寺にいる西岡楢光棟梁を訪ねなさいと言われた。しかし、「西岡」だけ覚えて、名前を忘れてしまったため、結局、西岡常一棟梁に出会うこととなった。西岡常一氏からは、大工としては歳をとりすぎているし、仕事もないことを理由として、弟子入りを断られてしまった。そこで、文部省で長野県にある仏壇屋を紹介され、一年間住込み修行した。その後一年半、島根県日御碕神社で図面を描き、三ヶ月兵庫県酒垂神社で仕事をした。

44 年春に、西岡常一棟梁から手紙が届き、法輪寺三重塔の再建の仕事があるので、来てもよいと書かれていた。西岡棟梁に会うと、「納屋の掃除をせい。これから一年間、新聞・テレビ・ラジオ・本などに一切目をくれてはいけない。刃物研ぎだけをしなさい」と言われた。弟子入りが認められたのだった。

毎日、法輪寺の現場から帰った後、食事の用意を手伝い、西岡棟梁の家族と寝食を共にした。弟子として何か教えてもらうことはなかったが、一度だけ西岡棟梁から削ったカンナ屑を一枚渡された。小川氏はそれを手本として、研いでは削り、研いでは削ると練習した。

ひとづくり

小川氏は、未来の宮大工を育成するため、52 年に鵤工舎を設立した。入社希望者は、8 年前には年間 300 人程度、今でも年間 30 人は受けに来る。鵤工舎では、①大部屋で生活すること、②全員同じ時に仕事・生活をすること、③新弟子は飯づくりと掃除をすること、④食事の用意は 30 分しかかけないこと、としている。工場には、西岡氏が書いた以下の額がかけてある：

「鵤工舎の若者につぐ。親方に授けられるべからず。一意専心、親方を乗りこす工夫をたくまずべし。これ匠道文化の心髄なり。心して悟るべし。」

ものづくり

宮大工と家大工の違いは、使う材の大きさにある。宮大工は、断面の大きい木を使う。大きい木の方が癖が強いため、これを把握して組まなければならない。宮大工はそれぞれの癖により将来の変形を予想した上で、各木材をどの位置、あるいはどのような部材に使うかを決める、部材も図面の寸法どおりに材を切るというわけではない。癖への配慮、目の錯覚の矯正による寸法的な調整がある。

道具というのは、人間の手の延長だ。道具の発達と共に、建物は構造の美から装飾の美へと移ったといえる。但し、いかなる時代の建物も宮大工が既存の道具を活用し、執念で造ったものだ。

西岡棟梁は、「煎じて煎じて煎じ詰めれば最後は勘」と言っていた。技を得ようとする人は自ら練習、努力で自分のものにしていかなければならない。

槍鉋実演

講演の最後に、小川氏による槍鉋の実演が行われた。槍鉋は、鎌倉時代以前に部材の仕上げに使われていた道具である。現在は歴史的な建物の修理などの際にのみ使われ、講演会では西岡棟梁により復原されたものを持参された。

槍鉋とスパイル状の鉋クズを前に（写真:小池）

質疑

藤井恵介（東京大学）：小川さんは古代の建物の修理で著名ですが、新築の建物を拝見すると中世の雰囲気が見受けられます。これは意識されていますか。

小川三夫：私は中世のお堂がとても好きなのでお堂などは中世風の意匠になっているかもしれません。

藤田香織（東京大学）：お弟子さんの修行の終わりはどう判断されるのですか？

小川三夫：修業期間は 10 年としています。そこでものにならなければ、別の道を進んだ方が良い。

藤田香織（東京大学）：厳しい世界ですね。本日は、貴重なお話ありがとうございました。

UIFA JAPON 25 周年記念誌作成グループ編集奮闘記、そして執筆された皆さまへのお詫びとお礼　中島　明子
UIFA Japon 25th Anniversary Editorial Struggle
NAKAJIMA Akiko

当初 2018 年度総会に間に合わせる予定が、9 月中の発行となりました。会長も稲垣弘子さんから森田美紀さんに代わられました。まずはこの件で重ねてお詫び致します。現在酷暑をかわしつつ、朝倉恵美子さんに編集をお願いして校正を重ね、次第に冊子の姿を顕し始めました。

編集を進めるにつれ、25 周年のアーカイブとしてふさわしいものにしたいという思いが強くなり、何度も何度も原稿を加筆・修正し、写真を探しながら進めてきました。皆さまの中には問い合わせや写真の提供のお願いを受けた方もおられると思います。ありがとうございました！

頂いた写真や原稿からこれまでの記憶がよみがえります。今は、最後の「未来に向けて」の写真を巡って検討しています。下手をするとエンドレスに、原稿と写真の修正と追加に陥りそうなところを、無慈悲な編集長としてはどこで切るか覚悟を決めなければなりません。この作業が、女性建築家の歴史を埋めてゆくために、可能な限り正確でなければならないことを自覚しつつも。

ところで、森田さんが作成された素敵な表紙のデザインや、内容についてお話してしまうと、楽しみが減ってしまいますが、若干ご紹介致します。

全体の構成とボリューム

全 12 章、約 180 項目と資料編（歴史・歴代役員・総会記念講演会・海外交流の会・この指とまれ！・NEWSLETTER・国際大会）からなり、A4 版約 150 頁、背文字が打てる厚さです。

UIFA 会長のド・ラ・トゥールさん

メッセージが届き冒頭に入れました。コラムで書いて頂いた方々の中には、親しみをこめて「ソランジュさん」としている方が少なくないのですが、「ド・ラ・トゥールさん」で統一しています。

冒頭で使った UIFA 会長ド・ラ・トゥールさんの写真

IAWA 委員長のドナ・デュネイさん

25 周年にふさわしく、UIFA JAPON との様々なかかわりを書いてくださいました。

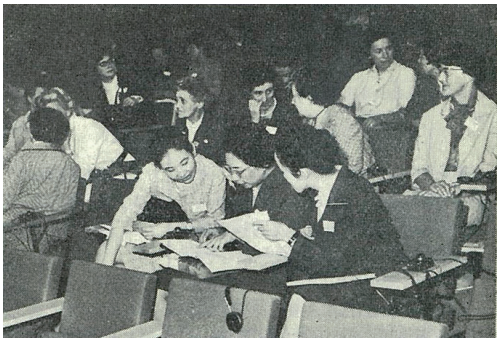
英文併記の目次だけで 10 頁を超える・・・！？

タイトルには英文を併記しました。目次にも英文併記すると 10 頁近くなってしまうので、章にのみ英文をいれ、あとは本文・コラムのタイトルに入れています。翻訳はこれまでにもお世話になっている高柳慶子さん。体調が良くない中で短期間に作成して頂き感謝しています。

記念誌は、遅れに遅れて 9 月にお手元に届く予定です。そして、この 25 周年の記録をバネに、UIFA JAPON の次の 25 年をつくってゆけるとよいですね。

UIFA JAPON 25 周年記念誌『平等で平和な美しい社会をつくるために』
Towards a Society with Equality, Peace and Beauty. UIFA 25th Anniversary Issue

表紙は、UIFA JAPON の活動の 25 年の記録というイメージで、様々な場面の写真で構成した。



編集の過程では色々な発見や、資料の発掘があった。上の白黒写真は、第 1 回の UIFA 世界大会に中原暢子さんと小林 (草野) 智恵子さんが参加した後、中原さんが JIA ニュース（1964 年 4 月 15 日号）に詳細な報告を書いた記事に添付されていたものである。
左上：会議場で発言の打ち合わせ中（左から通訳、中原さん、小林さん）
右下：パリ市庁舎を訪問、日本代表としてサインする中原さん

No. 110 Aug. 25, 2018

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒 102-0083
東京都千代田区麹町 2-5-4
第 2 押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@liql.co.jp
URL: http://uifa-japon.com
発行 2018 年 8 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

被災地通信（20）Report from the Disaster Area (20)

過去の災害から何を学んだか　岩井　紘子
Are We Learning from Past Disasters?　IWAI Hiroko

またもや関西圏大都市地震災害が起こった。可哀そうな小 4 の女の子。ブロック塀崩壊による犠牲だと知り、怒りが込み上げた。あり得っこない。1.2 mの既存土留用 RC 擁壁に 1.6 mの控え壁なしブロック塀を建てていたなんて。しかも小学校の敷地に。昭和 53 年の宮城県沖地震で多くのブロック塀犠牲者が出たことから、大幅にブロック塀に対する規制が厳しくなったというのに。一地方の問題にしか捉えていなかった結果であろうか。つい数年前の東日本大震災でも再三耐震化促進の必要性、屋内家具転倒防止、交通・ライフライン麻痺による食糧・日常生活破綻の常套化に対して注意喚起していたにも拘わらず、何ら対策が講じられていなかったことが浮きぼりに。

先日仙台市の情報館メディアテーク設計がご縁で、震災絡みの極小建築に臨んだ建築家伊東豊雄さんの講演 “みんなの家―その先へ” を聴いた。行政主導で作られる、単なる空間のみ提供する慣例的集会所の考え方に対し、行き場のない仮設住民の引き籠りを警鐘し、なにげなく集まれる、溜り場的空間を設計された。このコミュニティのあり方を模索提案した集会所 “みんなの家” は画期的なものであった。現在分散自立している仮設住民だった方たちも会場に見えていて、当時、人との交流で人格が再構築されたと。今や晴れやかな誇らしい姿が見てとれ、建築の意義を痛感したできごとだった。

最近の地元紙は、福島第一原発事故から住民全避難した大熊町、富岡町、いわき市等の復興記事が多くなった。震災はどこにでもやってくる。他人事でいるのはよくない。体験者の云わんとすることを真摯に受け止め、その意味合いを律する人こそ、最小限被災者となるのではと思う今日この頃である。

伊東豊雄氏設計の “みんなの家” に集う人々

訃報をお聞きし

川嶋幸江さんの思い出　吉田　あこ
Remembering KAWASHIMA Yukie　YOSHIDA Ako

私は川嶋幸江さんと共栄学園短大住居学科の教授としてご一緒に過ごしました。細やかなお心使いの曽根陽子先生もご一緒で、ひたすら主任の武田満す先生のご意向に沿うように工夫しながら教育内容を詰めました。武田先生は日本女子大学の名誉教授で住居学を築いてこられた方です。先生は「ミニ建築士をつくりたくないのよ。生活感覚を実践して住居を創る人を育てたいの」とおっしゃっておられました。これを一番反映したのが川嶋さんではなかったでしょうか…。

先ず夏休みにはご主人と一緒にアメリカに行き、ここで新聞広告を丹念に見て、米国人は住宅に何を求め、ビルダーは何を売り物にしているかを実際に交渉しながら味わい住宅を選定。入居条件を確認。入居。ご近所様とも挨拶し、ここで、生活をしてみる。さて、料理をと先ず魚を焼く。…と大変、消防車がサイレンを鳴らし幾台も駆けつけ、敷地を取り囲む。何事かと仰天。隣家の住民が川嶋宅の窓から黒い煙が噴き出しているのを見て、火事と思い消防を呼んだとか…。調理法の違いを痛切に感じる。身をもって異国の住文化を体験…。

川嶋先生はこうした実体験を反映させ、多彩な学生を育て、生活感の身に着いた建築士を世に送り出されました。心から尊敬いたしております。

1986 年 4 月　桜の前で曽根先生（左）吉田（中）川嶋先生（右）と 3 人で
（写真：曽根陽子）

■役員会報告

■ 2018 年度第 1 回 5 月 7 日　第 68 回海外交流の会『水辺のまち　江東を旅する』出版記念講演会収支報告。 第 69 回海外交流の会準備、講師は小川三夫氏におよび日程決定。2018 年度総会準備　役員交代審議。25 周年記念誌進捗状況。熊本住宅相談会報告。NL109 号 4/25 発刊・発送

■ 2018 年度第 2 回 7 月 18 日　6/16 開催 2018 年度総会報告　第 69 回海外交流の会　小川三夫氏「不揃いの木を組む」総会記念講演会収支報告　このゆびとまれ！京都編報告　第 70 回海外交流の会準備 11 月頃か　首都防災ウィーク参加準備　復興ハウス世帯向けプラン募集　岩泉町「住宅相談カフェ」開催準備　会則検討　ホームページ・パンフレット更新準備

■編集後記

懐は暑くならないねと若い人たちの言葉にうなずく（薄井）／ 40℃を超える猛暑、いよいよ地球が大変なことに…！何ができるか真剣に考えていかねば（牛山）／東京二期会オペラ「魔弾の射手」を鑑賞。ボヘミアの深い森を幻想的に具現化、新しい視座の舞台に感嘆（御船）／土佐の道をひた走り、林雅子さんの「海のギャラリー」に行き、やはり建物は実際の空間に入ってこそだと改めて認識しました（宮本）／矍鑠（かくしゃく）と生きるぞ！まずは心身機能を維持だ！とストレッチしながら素数を唱える浅はかな我（渡邉）／ 7 月の酷暑の中大阪に。水辺のかっこいい変化が、大阪らしさをなくしていました（須永）／今年の夏はめちゃくちゃ大きい二ノ宮神輿を担ぎます。いろんな意味でとにかくアツい !!（飯田）／この 8 月、熱帯雨季 5 月のスリランカからずーっと酷暑をひきづり（井出）